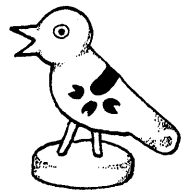


差し玉がのたまひ



永野 むつみ

この夏、都心の人形劇場で公演をした。日本児童・青少年劇団協議会創立二〇周年記念事業、七〇劇団一挙上演という企画への参加。観客は、子ども劇場、親子劇場など鑑賞団体を中心に全国各地からおいでいただいた。私たち人形劇団ひばりあむは、

S・G・コズロフ作・田中 潔訳『ハリネズミと雪の花——新年の前の日はなし』で、二日間、三ステージの公演だった。

最後のステージが終了して、私はいつものように

出口へ立ち、観客を見送っていた。すると、五、六歳の女の子がひとりで近づいて来た。差し出された手のひらに十円玉がのっている。

「客席に落ちていたの？」

尋ねると、じっと私をみつめたままかぶりを振り、さらにぐいとき出した。

「……もしかして、それ、私にくださるの？」

女の子は黙ってうなづいた。私は、思いもかけないプレゼントにおどろき、胸がいっぱいになった。

お名前を聞くのを忘れたほど。

どうして十円玉なのだろう——。それはそれとして、とてもうれしい。観劇の思いを託し、私に何かくれたかったのだろう。とりあえずの「気持ち」を手渡して帰ったのか、その率直さにくたれ。同時に、その日の出し物の影響をそこにみてるのは、深読みだろうか。

ちなみに『ハリネズミと雪の花』のあらすじは次のとおり。

新年の前の日、くまは高熱を出して寝込んでしまふ。病気を治すことができるのは「たのし草の花」だけだと聞き、親友のハリネズミは、森へ飛び出して行く。これまで誰も、見たことも、聞いたこともない魔法の花を探すために。途中で出会った「はこやなぎ」「とねりこ」「松」の助けによって「ハリネズミ」は、冷たい泉の底に花をみつける。何度も潜り花を採ろうとするが、しだいにハリネズミは凍っていく。一九六〇年代あたりまでのドラマならば、

死ぬまでハリネズミは花を採り続けました——という展開になるかも知れないが、九〇年代のひぼぼたあむのハリネズミは「このままだと自分も死んでしまう」と、採るのを断念し逃げてしまう。しかし、木々たちの力（これは魔法の力としか言いようがない）によって、ハリネズミはくまの元へ帰り着く。凍りついたハリネズミⅡ「たのし草の花」を抱いたくまは、熱が下がり病気は治ってしまふ。同時にハリネズミも解け、みんな揃って新年をむかえるという話。

とりあえずできることを

ハリネズミが木々たちに助けを乞い、助言を得たとき、彼は必ずこう言った。

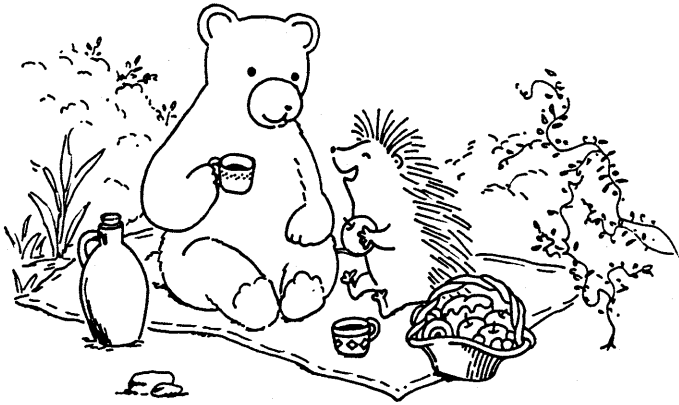
「ありがとう。そうだ、ぼくにしてほしいことはない？ もしたのし草の花をみつけることができたら、ぼくは、きみのためになんでもする」

すると、寒さの中でふるえながら、ひとり立っている。「はこやなぎ」は、自分の根元に雪をかき集めて欲しいと言う。そうすれば少しは暖かくなるだろうからと。ハリネズミは応える。

「そんなことなら、ぼくは今でもできるよ」

本来なら急いでいるはずのハリネズミが、出合った木々と誠実に、そして確かに、関係をぎり結んでいく。完璧主義とは対極の、ありあわせの、しかも精いっぱいの方で。そのつど、できるやり方で、できることをしていくハリネズミの生き方は、しなやかで、したたかだ。人と人との出会いとは、本来こういうものであったか。

このエピソードが、先の女の子の十円玉のプレゼントに直接に影響したのかどうか確かめようがないが、ああ、このドラマはそういうドラマでもあったのだと、少なくとも私は気付かされた。私はしばしばこんなふうに、観客によって脚本の読みとりを深められている。



山根 恵子・画

ありがとう「十円玉」さん。

ふいをつく一言

けいこ場ではあいまいだったことが、上演し、観客に観てもらってはつきりするということは、私個人に限らずよくある。とりわけ子どもたちの反応や、何気ない一言は、ふいをつく。おどろくほどの確で、「全て持って」生まれてきているのではないかと思わせるものがある。

またむすこの例で恐縮だが、彼らは私にとって大切な観客のひとりであり、ディスカッションし易い立場にあるので許して欲しい。

脚本が配られ、ハリネズミの役を振られた私は、健気なハリネズミの生き方に共感もしたが反発もあった。「私なら採りには行かないよ」と、むすこたちの前で言い切った。すると当時中学生だった長男は「本当か、本当にアンタ行かないで居られる

か」と私に言ったものだ。この問いかけに、まだ私は答えを出し切れていない。五年経った今でも揺れている。揺れているからそのつど新しく演じるしかない。開き直って言えば、これでいいと思っっている。すでにわかっていること、わかり切っていることを舞台上演って意味があるのだろうか。ある種の、児童むけと言われる演劇や図書のつまらなさの原因のひとつは、ここにあるのではないか。演劇で説くことはない。問、えはい。私たちはこう思うが、キミたちはどう思う？ おとなだって何もかもわかっている訳ではない。わからないことがあるから生きていておもしろい。大人はもつと堂々と、同じ悩める仲間として子どもたちの前に立っていいと私は考える。

観客に支えられて

初演を観た当時小学一年生の次男が言った。

「よかったねお母さん、くまくんに助けてもらって」

私は、頭をガツンとやられた気がした。長男とのやりとりでもわかる通り、見たことも聞いたこともない花を、ひとりで採りに行くというストーリー展開に心を奪われがちであった私は、大切なことを見逃していた。そうなんだ、次男の指摘通り、このドラマは、くまによってハリネズミが助けられるドラマでもあったのだ。高熱のくまに抱かれることで、凍っていたハリネズミが解け、生き返ることができたのだから。

考えてみると、私たちの暮しの中では、誰かが誰かを一方的に助けるなんてことはあり得ないのだった。障害者の場合も高齢者の場合も、一見、お世話する人とされる人とが役割を固定して担っているようにみえて、その実、お世話する側が、そのことで、自分の値打ちに気がついたり、人生についての哲学が洗い直されたりするなど、逆に支えられてい

るということはままあることだ。

私は子どもたちの、演劇を観る力を信じる。自分の観客の大部分が子どもたちだということに、畏れと誇りをもっている。

ありあわせの言葉で

『ハリネズミと雪の花』を観てもらったある幼稚園のできごと。

上演が済んで片付けをしている私たちのところへ、年長児クラスの女の子がやって来て言った。

「おもしろ……うん、さびしい人形劇、また観せてね」

居合わせた主任の先生が、私たちへの気遣いからか、

「あらあら、さびしいじゃないでしょ……」
とたしなめられた。

「いえいえ、大丈夫です。わかります」

と先生の次の言葉をおしとどめ、

「ありがとう、またね」

と言うと、女の子は、ありがとうと言葉を残して立ち去った。

おもしろいと言いかけて、さびしいと言い直した彼女の思いがよくわかる。おもしろいという言葉ではくくりたくないものが、彼女の内側にあったという事だろう。もっと他の言い方を、と考えたとき浮かんだ表現がさびしいという言葉で、もし、もっとたくさん言葉をもっていたら、ちがう言い方をしたのかも知れない。さびしいという言葉は通常の意味を越えている。けれども、わざわざ言いに来てくれたこと、わざわざ言い直したことなどから、かえって彼女の高まりは伝わってくる。しかし、彼女は満足しただろうか。もっとしっくりくる言い方はないかしらと思っただろうか。できればそうであってほしい。ありあわせの言葉を駆使しながらも、もっと的確な表現をと求めることで人間は、自分の

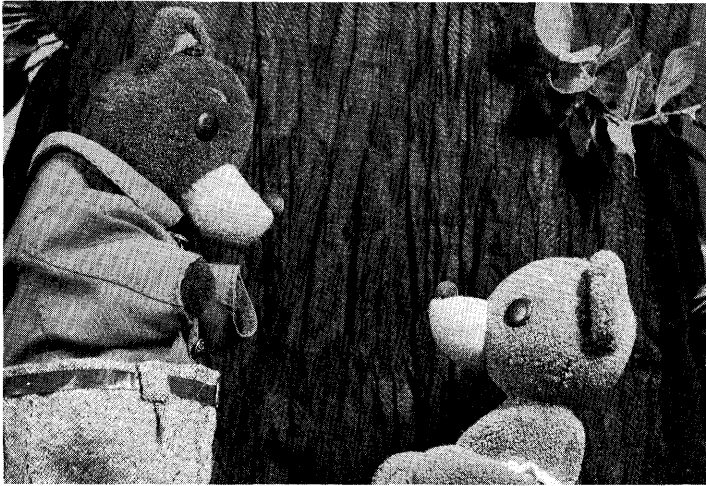
表現に言葉を豊かにしてきたのだろう。伝えたい相手と内容がなければ言葉は生まれない。

ぜひ、ありあわせの言葉だけでは表現できない

——と思わせるような人形劇でありたいものだ。

感想をひき出す

観客、とりわけ子どもたちの感想、意見を受け取るのはむずかしい。私たち劇団の仕事は、いわば種まきの仕事で、耕すことと育てることには直接には関われない。まいた種の行方に責任をもてないとは、はなはだ心細い仕事をしている。かろうじて、子ども劇場、親子劇場などの鑑賞団体とは、事前、事後の取り組みをしてディスカッションの場を創る努力をしているが、幼稚園、保育園とはなかなか機会がもてない。たまに子どもたちの感想文や絵などを送ってくださる園もあるが、私たちの側にそれを読みとる能力がないと、記録や記念の品という意



▲かっこうの卵とくまの子ティムチョ

味あいではなくなる危険性がある。それに、観劇後、一律に感想を言わせたり、絵を描かせたりするのはどうかと思うし、やはりじっくり、親や保育者に見守って欲しい。そして、できればなんらかの形で劇団の方へも伝えてもらえれば、私たちの仕事も、よりの確になっていくにちがいない。問題は、親や保育者に子どもの思いを引き出し、受けとめるセンスと技術があるかどうかということ。また、それらを伝えてやりたいと思わせる魅力が劇団にあるかどうかということではないか。

釈迦に説法

繰り返しになるが、子どもたちはありあわせの言葉で表現する。その言葉自体がなまじ意味をもつだけに、受け手は振り回されてしまいがちだ。本当は何を言いたいのか、前後の脈絡、気配、表情、姿勢、言い方、状況など丸ごと受けとめなければ子ども

もの心は把めない。しばしば悪気なく、とんちんかんな解釈をしてしまうことがある。これは対子どもに限らない。コミュニケーションとは元来そういうものだ。おとな同士だって同じこと。好きという言葉で大嫌いという内容を伝えることができる。こんなことは日常の暮らしの中でよくわかっていることだ。たとえば、駅で子どもが転ぶ。親が怒鳴る。

「何してるの！」

尋ねるまでのことはない。転んだのだ。見ればわかる。しかし「何してるの」なのだ。翻訳すれば、

「ぼやぼやするんじゃないの」であり、

「しっかり歩きなさい」であり、

「折角のよそいきが汚れてしまったでしょ」

「電車で遅れるじゃない」かもしれないし、

「私だって疲れてるのよ」かもしれない。

「アンタはいつだってこれなんだから」というものもあるかも知れない。「何してるの」の一言は、実に豊かな内容をもつ。演劇のセリフはここによりか

かっている。

脚本に描かれた「何してるの」の一言をどう言うか。どんな内容を含ませて発するか、俳優は腐心する。観客は創造的想像力をフル回転させて受け取る。「何してるの」の一言がどんな意味をもっているか感じようとする。さながら、出合ったばかりの恋人の、一挙一動を見守るように。言い換えれば、人間への興味がなければ演劇は楽しめない。演劇は人間への興味をかきたてる。結果として、人間をみる目やコミュニケーションのセンスも育ててくれる。演劇と子育てはとても似ている。いい俳優、いい保育者になれるとは限らないが、いい保育者はいいい観客になれる。ぜひ、子育てに関わる全ての人々に、もっと演劇に触れて欲しい。できれば観るだけではなく演じることも、脚本を書くこともすすめた。いい保育者はいいい俳優に、いい脚本書きになれる可能性をもっているはずだから！

(人形劇団 ひぼぼたあむ)